

Mr. Kitamura's

読む漢方

YOMU KAMPO

きたむら さぶろう
北村 三郎

1936年、東京生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。1961年にいすゞ自動車入社。北米部長、事務合理化推進室長、いすゞ能力開発センター社長を歴任し、いすゞ自動車の再建にあたって風土改革の参謀を務めた。1996年に定年退職後、独立。現在、人と情報の研究所代表、株式会社コア取締役。風土改革、企業改革の講演、執筆、コンサルティング活動を行う。

著書

「窓際に立てば会社がよく見える」(第二海探隊)
「心の革命」(第二海探隊、共著)

漢方薬は一つの病気だけではなくいろいろな病状を治癒させる効果があります。万能薬ということですね。もちろん健康な人の体質改善を促進する効果もあります。漢方薬には即効性はありません。ゆっくり効いてくるのです。「読む漢方」では、心と身体が元気になるような話題を取り上げられたらいいなと思っています。

○「袖すり合うも他生の縁」という言い伝えがあります。「多少の縁」ではなく「他生の縁」なのです。

人生は枝分かれの連続と聞いていいでしょう。あなたはどのような両親から生まれましたか。どの学校で何を勉強してきましたか。どのような先生、お友達に出会いましたか。どのようなきっかけでイオンで働くようになったのでしょうか。今、どこに住んでいますか。思い出してみればいくつかの分かれ道があったはず。その枝分かれのときに誰か他人が関わっていませんでしたか。枝分かれには「出会い」が深く関

今回のテーマは

「出会い」です。

わっているというのが、私が体験から学んだことです。

○私は子どものころ、近所でも評判の悪ガキでした。家で勉強などしたこともなく、小学校では劣等生でした。中学校に入ってから、私を一人前に扱ってくれる英語の先生と出会い、私を一人前に扱ってくれる英語の先生と出会いました。その先生のファンになった私は、英語を熱心に勉強するようになったのです。「英語だけはできる」という気持ちが次第に自信につながっていきました。

その後、私は定時制高校(夜間高校)で学

びました。夜間高校では男子は菓子職人、大工見習い、郵便配達など、女子は看護婦見習い、タイピスト、給仕など、みんな働ながら学校に通ってきます。私はまだ就職していません。この時代に出会った友人たちから、「実社会の社会学」を予習させてもらいました。

その後、社会に出るから仕事、趣味、生活を通じて様々な出会いがありました。そして私の人生は枝分かれしていきました。

○平成15年6月上旬、イオン労働組合の「披





大同志塾」が富士聖ヨハネ学園(山梨県忍野村)で開催されました。富士聖ヨハネ学園は知的障害者(児)160人が生活している福祉施設です。「拡大同志塾」は「同志塾」の1期生、2期生、3期生の中から希望者が参加して、一緒に異体験をするという試みです。「拡大同志塾」は過去に2回開いており、第1回はイエローハットの中部物流センターで、第2回は国府津の水中央で開催されました。

今回は3回目です。

新妻健治さん(中央執行委員長)をはじめとする14人の参加者は雨森園長の説明を聞いたあと、2人づつがペアになって生活棟に入って知的障害者(児)の方々と交流したり、食事をしたりしました。知的障害者(児)とは言葉を使わないで意思を届け合わせなければなりません。夜は忍野八海にある民宿「富士之家」で学園の職員7人と交流しました。翌日は再び学園を訪問。障害者(児)の方々とゲームをしたり、雨谷忍さん(事業担当執行委員)が制作した「とべないホテル」という手作り紙芝居を演じて楽しみました。富士聖ヨハネ学園の園長、雨森探丹さんは夜間高校で一緒に学んだ同級生でした。その後、雨森さんは早稲田大学(夜間)に進学して心理学を学びました。

大学3年生になった雨森さんが課外実習で

福島県の福祉施設を訪れたときに谷昌恒さんに出会いました。谷昌恒さんは後に北海道の遠軽にある家庭学校(児童自立支援施設)の校長として生涯を送った人です。谷昌恒さんの福祉にかける思いに感動した雨森さんは福祉の道に進む決断をしました。

その後、東京都の心理職という職員になり福祉事務所などで働いてきました。雨森さんと久しぶりに再会したのは、今から15年前のことでした。雨森さんは東京都練馬区にある福祉高等学校の先生をしていました。私は雨森さんとはまったく違う企業戦士の道を歩んでいましたが、何か共感しあうところがありました。その後、雨森さんは富士聖ヨハネ学園の福祉の現場に身をおくようになり、現在に至っています。私の友人である雨森さんとのご縁が活かされて、イオン労働組合の皆様が貴重な体験ができたことを私は嬉しく思っています。

○今、地球上には64億人の人が住んでいるといわれています。私たちは生涯でそのうちの何人くらいの人たちと出会うのでしょうか。私は数年前、出会いの棚卸しを試みたことがあります。出会った人が10000人、顔と名前を覚えている人が1000人、友達になった人が100人ほどでした。あなたはそれぞれ何人くらいになるのでしょうか。

私が50歳を超えた頃、学生時代の友人と先生、社会に出てから出会った思い出のある人たち66人を1ヶ月かけて訪ねたことがあります。この「再会の旅」をしたことで私は時代の変化、そして人生の味わいに気づきました。

この体験から「同志塾」の塾生には「旧友と再会する」という課題を實行していただいております。

私自身、これからも過去の出会いを大切に、新しい出会いを求める旅を続けていきます。日本国内はもちろん、世界各地の人たちと出会い、いろいろな文化に触れていくことを楽しんでいきたいと思っています。

○将棋の名人だった米長邦雄さんが書いた「人間における運の研究」(致知出版社)からの言葉です。「出会いの機会は誰にも公平にある。この公平な機会をどのような質と程度、の出会いとしてとらえられるかは、求める気持ちの質と程度にかかっているということでしょう。必ずその人の実力相応の出会いになっている。いい出会いを持ちたかったら自分の実力を磨き、高めることです。」

○今、私がいちばん心がけていることはよい出会いを分かち合うことです。特に50歳を過ぎてからたくさん素晴らしい出会いがありました。今までに培ってきた出会いを多くの人たちと分かち合いたいと思っています。

コンピュータの用語にWWWというのがありますね。ワールドワイドウェブの略で「世界に広がる蜘蛛の糸」という意味です。人は誰でも出会いのウェブ(蜘蛛の糸)を持っています。そのウェブ(蜘蛛の糸)をお互いにつなげていくと人生は面白く展開していくようです。

(連載完了)